

折に触れ 四字熟語

NO. 48 『夏雲奇峰』 かうん きほう

< 意味 > 夏の青空に現れる入道雲のめずらしい峰の形のこと。

< 出典 > 顧愷之^{こがいし しんじょう}「神情詩」

神情詩 摘句（神情の詩）

春水満四澤 春水^{しゅんすい} 四沢^{したく}に満ち

夏雲多奇峯 夏雲^{かうん} 奇峯^{きほう}多し

秋月揚明輝 秋月^{しゅうげつ} 明輝^{めいき}を揚げ

冬嶺秀孤松 冬嶺^{とうれい} 孤松^{こしょう}秀づ

通 釈： 春は水がゆたかで、四方の沼沢にあふれ

夏は入道雲が現れて、空に珍しい峰の形を描き

秋は月が澄んで、明るい光を夜空にかかげ

冬は冬枯れの山に、松がただ一本めだって、ときわの緑を誇示する

語 釈： 神情とは、「いうにいわれぬ趣のあるここち」の意で、「陶淵明集」にはこの四句を「四時」と題して淵明の詩としているが、実は顧愷之^{こがいし}の長編古詩「神情詩」の一部分とみるべきで、けだし淵明はそのうちの四句を会心の作として摘出したものであろう、とされています。顧愷之は晋代の画家^{あざな}、長康^{ちようこう}、五世紀の初めのころの人。

一 言： 夏シリーズその1

梅雨は明けてとっくに夏になったはずなのに、長寿・迷走の台風5号の影響で各地に風雨による被害が出ています。夏らしい入道雲の空が待たれます。

参照文献： 角川書店「中国名詩鑑賞辞典」 三省堂「四字熟語辞典」